

# アイコン・インデックス・シンボル

## 概念再定義への試み

野口良平

### はじめに

アイコン (icon), インデックス (index), シンボル (symbol)。この三つ組は、チャールズ・サンダース・パース (1839 - 1914) の記号論 (semiology) の考え方の中で、柱石としての位置を与えられている概念である。この論文は、この考え方が人間や社会の学に与える可能性の検討と、再定義への試みである。

人間は、自己と世界 (他人や社会を含む) の関係を整えるために、言語 (記号) を用いる。言語 (記号) の本質とその諸用法の検討は、学の現状を反省し、本来の課題と目的にむかわせしめるための有効な方法でありうるだろう。かつてプラトンは対話編『クラテュロス』において、言語本質の探求が学の再建にとってもつ重要性を示唆したが、パースの記号論は、フェルディナン・ド・ソシュールの言語学と並び、『クラテュロス』の系譜に連なる位置に立つものにほかならない。

ソシュールの強い影響のもとに出発した言語学者のロマン・ヤコブソンは、パースの死後50年近くをへた1962年、パースの議論の画期性を主張する論文「言語本質の探求」を世に問うている。この論文はヤコブソンが、ソシュールの考え方を高く評価しつつも、その欠落を補うパースペクティブを探りつづけていたことをうかがわせるものである。ヤコブソンは、ソシュールとパースの比較が言語論にとってもつ有効性について語っているが、この論点は、本論においても一つの示唆としてはたらいっている。

本論ではまず、言語 (記号) 論の嚆矢と目される『クラテュロス』の議論をとりあげ、その論点を取り出していく ( )。つぎに、『クラテュロス』の脈絡に属する、アイコン・インデックス・シンボルの三つ組みからなるパースの記号論を、言語論の一種として再定義する可能性を論じていく ( )。

### 『クラテュロス』からの問い

#### 1 ヤコブソン「言語本質の探求」

言語学者のロマン・ヤコブソンは、「言語本質の探求」という論文において、パースの構想した「アイコン、インデックス、シンボル」の三つ組の記号論がもつ新しい可能性に光をあてようとしている<sup>1)</sup>。この論文を読むと、彼が、それまで言語学の分野で自分がとりくみできた探求のあり方を更新する可能性を、パースの仕事から受けとろうとしていたことが伝わってくる。

もともとヤコブソンにとっての導きの糸は、ソシュールの「言語の恣意性 (arbitraire)」という考え方であった。言語は、個々の使用者の意図や関心から自立した一般者としても指定することができる。こうした試みは通常、「形式化」とよばれている<sup>2)</sup>。ソシュールは、言語活動の総体 (ランゲージュ language) から抽象され、実際の言語使用 (パロール parole) とは区別されるような形式としての言語 (ラング langue) を、「シニフィアン signifiant (意味するもの、能記)」と「シニフィエ signifié (意味されるもの、所記)」の対性 (記号, シーニュ signe) の体系として規定して、人間が行うあらゆる世界分節の権利上の起点にそこにみようとす<sup>3)</sup>。

ここで重要なのは、シニフィアンとシニフィエの両者の関係には、なんら必然的な根拠がない (=恣意的)、とみなされることである。たとえば、「水」と呼ばれているものは、その名で指示されなければならない、という必然性を全くもっていない。それは“water”と呼ばれるかもしれないし、“eau”と呼ばれるかもしれない。シニフィアン (「水」「water」「eau」etc.) とシニフィエ (水) の関係は、習慣上のとりきめ、約束、という以外の根拠をもっていない。これが、言語活動の成立を支える一般的な形式であるということができる。いかなる個別言語にも言語の形式をみることができる。従ってどの個別言語も、人間の言語活動の場所としては対等とみなされるべきである (諸言語間には本来優劣の関係は存在し得ない)。

ヤコブソンは、この「言語の恣意性」という考え方に共感をおぼえ、この原則の有効性を立証するという目的から、「音と意味の関係」についての研究をすすめていた。しかし、しだいにソシュールの主張の効力がある限界をもつことに気づくようになる。シニフィアンとシニフィエの関係は、たしかに約束にすぎないかもしれない。しかし、現実の日常生活では、そのようなことは必ずしも信じられてはいないのではないだろうか。

ドイツ系スイス人の農婦が、かりにこうつぶやいたとしよう。「フランス系の人たちはなぜチーズをさして“fromage”というのだろう。自分たちにとっては“Käse”のほうがずっと自然だというのに」。この農婦のつぶやきは、一見「言語の恣意性」という考えと矛盾するかにも見えるが、実はソシュール自身の考え方よりもさらに徹底した地点を志向しているのではないかとヤコブソンは述べる<sup>4)</sup>。この事例をあげるヤコブソンの眼目は、指示対象の存在についての共通了解の可能性が信憑されている条件のもとでは、“Käse”のほうが“fromage”よりも「自然だ」と農婦が感じたとしても当然のことなのではないか、ということである。

「言語の恣意性」の主張は、私たちにあって一見どんなに自明で客観的なものとしてあらわれているような世界像も、ある特定の観点の相関項でしかありえない、という事態に根拠をもっている。もしそのことを見落とすならば、「言語の恣意性」の原理を、特定の観点自体の否定、というあり方と結びつける考え方も当然、現われることになる。しかし、ヤコブソンはここで、シニフィアンとシニフィエの恣意性、という考え方を支え、その源泉となっているのは、実はその特定の観点にほかならないのであって、両者は矛盾・対立の関係ではなく、むしろ相補的な関係を示すものなのではないか、とみている。ヤコブソンの直観は、正鵠を射たものといわなければならない。

シニフィアンとシニフィエの対からなる「言語 (ラング)」は、言語を使用者の意図、関心から独立した理念的な対象とみる限り、存在理由をもつ。しかし、それはあくまでも理念的な存在であるにすぎず、実際に人間同士の間で用いられている言語 (「パロール」) とは、区別されるものである。シニフィアンとシニフィエの関係が原理上、恣意的 (人間の意図とは独立) であるとしても、実際のところは、両者の間に何らかの意図を介した関係が与えられない限り、決して現実の言語活動

は成立しえないからである。

「わたしはあなたが好きです」という表現は、原理上、いくらでも別の言い方に置き換えることができる。しかし、たとえ他の表現に置き換えたとしても、そこで言われようとしていること（意図）が変わってしまう、というわけではない。シニフィアンとシニフィエの恣意性は、むしろ、言語使用者の意図によって利用されるべき道具的対象であると言えることができる。ある種の意図が存在すること、そのことこそが、シニフィアンとシニフィエの恣意性を「保証」しているのであって、決してその逆ではないのである。

形式としての言語と、現実にも用いられている言語の区分を照らし出す装置としてヤコブソンが見出しているのが、パースの記号論である。

シニフィアンとシニフィエの恣意性、という言語の形式は、それを道具として用いる人間の意図との相関関係に置かれることで、はじめて意味をもつといえる。言語使用の実態が示すのは、実はそのことにほかならない。パースは、言語を一種の道具（記号）とみる立場に立つ。ソシュールが断続（恣意性）をみるところに、彼は連続（類似性、因果性、約定性、という三通りの関係）をみる。さらに、この諸関係をそれぞれ表示する作用を、アイコン（性）、インデックス（性）、シンボル（性）、とよぶことで、現実の言語活動の用法（ソシュールが「パロール」とよんだもの）の検討に道を開くことになる。

パースは、記号の三つの型すべてにおいて、三つの機能がそれぞれ異なった程度で、互いに協力しているということに強い関心をもったが、とくに言語的なシンボルにおけるアイコン性とインデックス性に対して細心の注意を払っていた。（「言語本質の探求」, p.41）

ヤコブソンによれば、詩的言語は、シンボルが、アイコンとインデックスの複合として成立している事情をみていくうえで格好の素材である。ジュール・ロマンの小説『子供心の恋』の最後の章は、“Rumeur de la rue Réaumur（レオミュール街のざわめき）”と題されているが、ここで作者は、このパリの通りの名前が、“chant de roués et de murailles（車輪と城壁の歌）”に似ていて、パリのさまざまな物音や、空気の震え、群集のざわめきなどをよびさますのだという。これらのモチーフは、小説の主題である潮の満ち引きととけあって、“rue Réaumur”という音の具合の中に具現されている。ここには、シニフィアンとシニフィエの恣意性を前提としながら、その恣意性を積極的に活用していこうとする人間の創意が示されていて、それこそがパースが理論においてめざしたところのものである、という。

言語の形式化の存在理由を認めながら、そこで終わるのではなく、実際に用いられている言語の諸相とその本質を明らかにすること。パースの三つ組の構想は、このような新鮮な課題を示唆しているのである<sup>5)</sup>。

## 2 対話編『クラチュロス』

ヤコブソンは、「言語本質の探求」の中で、記号論や言語論の嚆矢と目されるべき古典として、プラトンの対話編『クラチュロス』の名前をあげ、ソシュール、パース、および自分の議論が、

『クラチュロス』からの問いへの、二千年あまりをへだてての応答の試みにほかならないことを述べている。

『クラチュロス』は、「名前の正しさについて」という副題をもつ作品で、プラトンの著作の中では、『プロタゴラス』『ゴルギアス』と並んで、B.C.380年代、30歳代のころに書かれた初期作品群の中に位置づけられるものである<sup>6)</sup>。

クラチュロスは、「万物は流転する」という命題とともに知られるヘラクレイトスの弟子であったと伝えられている。ヘラクレイトスによれば、同一不変の存在というのは世界のどこにも存在しえないので、絶えざる生成流転こそが物事の真のありさまである、という。世界についての相対的な感覚に、強い実在性が感じられていたことをうかがわせるが、クラチュロスはそのヘラクレイトスの影響下で言論活動に従事し、若きソクラテスにも影響を与えていたといわれている。

『クラチュロス』は、ヘルモゲネスという若者が、ソクラテスに対して疑問をぶつけるところからはじまる。

こちらのクラチュロスがね、こう主張するのです。名前の正しさというのは、それぞれの有るものに対して、本来本性的に(=自然に)定まっている。そして名前とは、幾人かの人びとがそう呼ぶことを申し合わせて、自分たちの言語の一部として発音しているものではなくて、本性的に存在しているものであって、自国の人であれ外国の人であれ、万人にとって同一のものなのである、と。しかし私には、取り決めと同意以外に何か名前の正しさの基準があるとはどうしても思えないのです。これについてソクラテスよ、あなたの考えをきかせてもらえないでしょうか。<sup>7)</sup>

これに対し、ソクラテスはずぎのように答える。

名前をつける、ということは、人間が生きていく上での一つの技術である。したがって、名前のつけ方にも、よいものとわるいものがあるはずである。名前のつけ方がよいとは、それぞれの事物が、その本性にふさわしい仕方で区別されるということである。名前はたまたまの取り決めである、という以上のことが、このことには含まれているのではないだろうか。ソクラテスは、「本性説」の長所を確認する。

つぎにソクラテスは、では事物がその性状にふさわしい仕方で区別される、とはどのようなことだろうかと問い、具体的な吟味作業をはじめめる。

たとえば、父アガメムノンを殺されたため、母とその情夫を殺して復讐をとげたオレステスの名は、「山の男」という意味をもつ。命名者は、そのことによって彼の本性が野獣的、野性的であったことを示そうとしている。また、アガメムノンとは、留まること(epimone)において称賛すべき(agastos)という意味であり、それは彼がトロイアに長期間大軍をとどめて粘り強く戦ったことを表現しようとしたのである。

「神々」(テオイtheoi)という名前についていえば、もともと人々が太陽、月、星々、天などをあがめ、人々は、そこに「駆け抜けるもの」(thein)の幻影をみようとしたりして生まれている。

このあと、「ダイモン」「英雄」「人間」についても同様の作業がなされたあと、自然の構成要素である「太陽」「アイテール」「空気」「火」「水」などについて検討されていく。さらに吟味は、人

間の特性や感情を表現する言葉である「思慮」「正義」「苦痛」「悲しみ」「痛み」「美しい」「醜い」等々におよび、壮大なスケールにおいて展開されていくことになる。

ここでソクラテスの対話者は、ヘルモゲネスからクラチュロスに変わる。

クラチュロスは、名前と事物との間には必然的な結びつきがあり、名前は事物の本性を再現しているのだと考える。彼によれば、数々の語源的な知見はまさにそのことを象徴的に示しているのである。したがって、名前を知るであろう人は事物をも知るといえるのではないだろうか。

こう問いかけるクラチュロスに対しソクラテスは、つぎのような意表をつく答え方をしてみせる。

たしかに君の言うとおり、名前が単なる取り決めである、という言い方にも無理があり、その起源を思い描いてみるならば、そこで事物の本性が、名前と事物の類似性を用いる形で指示されようとしていることも、理解できることである。しかし、そこで起こっていることを“再現”ということは、言い方としては適切ではない。むしろそれは“表現”とよばれるべきものである。

またクラチュロスは、「万物は流転する」という事物の本性がいかに正しく表示されるか、という基準によって“名前の正しさ”をみようとしているが、そこにいう“正しさ”は、結局のところ、「万物は流転する」という形而上学的な信念の“正しさ”のことにすぎないのではないか。しかしその信念の“正しさ”は、いったい誰によって知られるのか。それがすでに共有されている暗黙の習慣や約束といったものではないとどうしていえるのだろうか。

いくら「美」の語源を吟味したとしても、美の本質を知ることができるわけではないように、言語学的な知見が、事物の本性について教えるという考え方は、転倒したものである。それと同様に、言語や記号の本性についても、言語学が教えるということではできず、それが実際に言語や記号が自分達の生活において用いられている仕方を見、検討をくわえていくところからしか、その本性を思い描くことはできないはずである。これが『クラチュロス』全編を通じてソクラテスのたどり着くことになる結論である。

### 3 言語における一般性と固有性

『クラチュロス』では、言語の成立が二つの異なる要素の関与によって可能になっていることが前提となっている。

ヤコブソンによれば、『クラチュロス』の中心問題は、名前の正しさは、事物の本性との一致にもとめられるのか、それとも約定に由来するものなのか、という問いである。ソクラテスは、「類似による表示のほうが恣意的な記号を使用するよりもまさっている」という意見に傾くが、しかし同時に、補助的な要素である約定、しきたり、習慣の役割を承認せざるをえない。

ここで重要なのは、この対話編が、「本性説」と「約定説」のいずれが真か、という仕方で展開されているわけではない、ということである。そのどちらも、それなりの存在理由をもつ意見である。二つの意見が、もし検証不可能な物語の形で補強されるならば、両者は対立的なものとしてのみ思い描かれることになるが、二つの意見がいったい何を根拠に生じているのか、と問うことができれば、それぞれの説が、対立者によって検証可能なあり方を示すにいたるはずである<sup>8)</sup>。

「名前の正しさは事物の本性を表示していることに由来する」という考え方は、言語使用者の、

世界と言語に対する一回性，固有性の感覚，というべきものに由来するものであるといえる。ソクラテスのクラチュロスへの疑問は，君は「事物の本性」というが，その言葉の意味を私たちはどのようにして思い描くことができるのか，ということであって，クラチュロスの意見自体を無効とみたわけではない。

他方，「名前の正しさは約定にのみ由来する」，というヘルモゲネスの考え方は，ソシユールの「言語の恣意性」をそのまま思わせるものである。この考え方は，言語の形式が言語使用者にとってもつ一般的有用性を根拠としているはずだが，ヘルモゲネスはこの点について説得的に展開しているとはいえない。

言語の使用には，つねに相反する二つの要素が介在している。一つは，言語の恣意性が示しているような一般性の要素で，数学や科学の言語はこの部分に重心をおいて成立するだろう。もう一つは言語が一人一人の人間の脈絡に沿って用いられるという固有性の要素で，たとえば詩や宗教の言語は，この部分により大きな比重がおかれることで成立するだろう。

言語についてのさまざまな議論は，この両者 言語における一般性と固有性のあるべき関係が未規定であることによって生じる。そのことが見過ごされるならば，言語論はかならずや，不毛なスコラ論議としての色彩を帯びることになるだろう。ソクラテス＝プラトンの慧眼は，すでにそのことを洞察していたことである。

対話編『クラチュロス』は，「名前の正しさ」への問いの基底に隠されている問いを明るみにする。それは，「約定説」と「本性説」の対立を示すことで，言語における一般性と固有性，という二つの要素の存在を照らし出そうとしている作品なのである。

#### 4 記号と言語の区分

『クラチュロス』に眼をむけて自分の仕事の基準をとりだそうとした一人に，美術史家のE.H.ゴンブリッチがいる。ゴンブリッチは，1960年に上梓した著作『芸術と幻影』において，『クラチュロス』が試みていたような「再現」と「表現」の区分が，芸術作品の創作と享受において決定的な意味をもつ事情を明らかにしようとしている。

P.モンドリアンに『ブロードウェイ・ブギウギ』という作品がある。これは，縦横の直線の組み合わせで表示された空間に，黄，赤，青の彩りを配した絵画である。作者によって示される表題は，この作品が絵画による音楽ともいふべき，視覚像と聴覚像の相互乗り入れと，それに伴う固有の情緒の喚起をめざす試みであることを示唆している。

視覚と聴覚は，便宜上区分することができる。しかし，絵画で音楽を表現する，という企てが可能になるのは，視覚と聴覚をふくめて諸感覚が，人間にとってかけがいのない味わいや情緒をもたらす源泉として統合されている，という事実あつてのことである。このゴンブリッチの分析は，『クラチュロス』において，名前は事物の本性を再現するもの，と主張したクラチュロスに対して，ソクラテスがそれは「再現」ではない，「表現」と言われるべきものなのだ，と述べたくだりを，作品とその意味の関係に置き換えて展開させたものである<sup>9)</sup>。

作品とその意味の関係を「再現」というなら，モンドリアンにおける絵画と音楽の関係も，青信号と「すすめ」の関係に等しいということになる。青信号と「すすめ」には本来何の関係もないが，

いったん約束が成立すれば、青の点灯は「すすめ」という意味を自動的・習慣的に“再現”することができる。しかし『ブロードウェイ・ブギウギ』の場合は、視覚と聴覚の相互乗り入れ、という趣向に妙味を感じるとともに、そこから受け取った作者の像を手がかりにして固有の情緒を引き出すことのできる人間が存在しなければ、絵画と音楽の関係はまったく意味をなさないし、もっと根本的なことに、作品の“表現”自体が存在することができないだろう。もしこの作品を無題で、何の脈絡もないままに受け取らなければならなくなったとしたら、私たちに何ができるか想像してみればよい。

ここでゴンブリッチが述べているのは、芸術は「記号」ではなくて「言語」である、ということである。「記号」は、それがいったん成立すれば、個々の人間の意図や欲求とは無関係になにごとかを再現・表示できるという有用性をもつが、「言語」はむしろ、人間の意図や欲求（あるいはそうしたものを無化したいという欲求）の表現・理解を可能にする点に存在理由をもっている。芸術が「記号」であるならば、そこで事柄の再現に用いられている規則を学習することで、客観的な意味内容に到達できることになる。しかし、もし芸術がそのようなものにすぎないのだとしたら、そもそもなぜ、それが人の心を惹きつける、ということがおこりうるのだろうか。

『芸術と幻影』でとりあげられていたこの主題は、『棒馬考』（1963年）においては、「表象（representation）」と「喚起（evocation）」は違う、という主張として変奏されている。そこでは、何の変哲もない（隠喩でもなければ空想の産物でもない、つまり何かを表象、もしくは再現しているわけではない）棒馬 箒に馬の頭のしるしがついたもの が、なぜ、人間にとってよるこびをもたらすということがおこりうるのか、という問いが提示されている。ゴンブリッチが用意しているのは、それがむしろ隠喩、空想、表象から人間を自由にするところから来ているのではないか、という興味深い答えである<sup>10)</sup>。

シニフィアンとシニフィエの関係を、再現・表象関係とみるなら、そこにあるのは因果律の世界である。たしかに芸術は、この因果律の世界が不自由である、という感受に発するものであるが、因果律自体の伝達とは区別されなければならないだろう。もし棒馬がよるこびをもたらすことができるとすれば、棒馬が「馬にのる」という無償のたのしみを想起させることを通して、因果律から自由な世界をたとえ一瞬であっても「喚起」するからである。作品とその意味の関係を、再現・表象関係（記号）から表現・理解関係（言語）の中に置きなおしてみる観点を、ゴンブリッチは『クラチュロス』から受け継いでいるのである。

## アイコン・インデックス、シンボル

### 1 カントから線を引きなおす

『クラチュロス』の議論は、煩瑣な議論を招き寄せる危険のある言語（記号）論を、本来の課題に立ち返らせる意図をもっていた。私の考えでは、その一つは、言語における一般性と固有性の関係を明らかにすることであり、もう一つは、記号と言語の区別の根拠を明らかにすることである。

言語（記号）は、一般性と固有性という二重の顧慮によって成立するものであり、その用法も、

数学や科学から法律，政治，宗教，文学にいたる多面性を備えもっている。

パースが生きていたのは，科学的世界像と宗教的世界像の相克葛藤が深刻化していた時代である。パースの記号論の構想の根本にあったのは，この二つの異質な世界像が，本来はどのような関係において成立しているといえるのか，という問いにほかならなかった。この問いの解決を，科学と反科学，制度と反制度のような二元論に求めるのではなく，二項間の相関関係の明確化，という仕方で行おうとしたところに，パースの記号論の可能性が示されているとあってよい。

科学と反科学，制度と反制度のような二元論に依拠した世界像が有力でありつづけていることは事実である。物か心か，決定論か自由意志か，唯物論か観念論か，というような，思想史上繰り返されてきた対立は，いずれも二元論的世界構成の産物にほかならない。こうした対立を解決するためには，どちらが正しいのか，と考えるのではなく，そもそも二項間の相関関係がどのような根拠と条件のもとに行われているのか，というふうに問いを立て直してみる必要があるだろう。そのような仕方でも問いを提示した有名な議論が，カントの「純粹理性のアンチノミー」である。前号掲載論文（「信念の検証について」）と記述が重複するが，繰り返し要約を試みておくことにする。

カントは『純粹理性批判』（1791）において，従来の哲学（形而上学）が考えてきた問題を，世界の起源と限界についての問い，物質の分割根拠についての問い，自由と自然的因果律の関係についての問い，神の存在についての問いの4つに整理する。これらの問いは，そもそも人間の理性の限界をこえる問いであり，答えを探すこと自体が不可能である。無理に答えを出そうとしても，結局のところ，ああもいえる，こうもいえる，としか言いようがない。形而上学の問いがこのような二律背反の形をとることを，カントは「純粹理性のアンチノミー」と呼んでいる。

このような形而上学の問いは，もともとは客観世界（世界の本質）を理解することへの欲求から生じたものである。しかし，人間には，そもそも客観世界を認識する能力がない。人間にできるのは，世界がみずからの感官に現われ出る仕方（＝現象世界）を把握することだけである。客観世界を認識できるものがあるとするれば，それは神でかである。神のみに認識できる客観世界を，カントは「物自体」とよぶ。

人間の理性は，「物自体」を認識することはできないが，同時に不完全なものから完全なものを思い描かずにはいられないような本性をもっている。そこから，現象世界の法則や構造の認識，「物自体」を意欲し，思い描くこと，という二つの異なる活動領域が想定され，悟性（経験科学），理性がそれぞれを分担する，とされる。このカントの分析は，人間が，閉ざされた状況に拘束されている面（有限性）と，それゆえにこそ状況の外側を思い描かずにはいられない面（無限性）という，二重の様式において存在していることを示そうとしたものである。二元論的世界構成を人間存在の二重性に基礎をおくものとして再解釈する視野が，この分析からは開けてくることになる。言語（記号）の二重性も，カントのアンチノミーの議論を援用するならば，人間存在のそれに由来するものとして理解することができるように思われる。

## 2 三つ組みの記号論

二重の様式において存在する人間が，二重の様式において現れる世界と関わろうとするときに用いられるのが，言語（記号）である。パースの「記号論」は，言語（記号）の成立条件の記述の試み

にほかならない。パースの議論の輪郭をできるだけシンプルな形で取り出してみることにする。

目の前に事象A(雲)がある。このAは、それを見る人の心中で別の事象B(雨)と結びつけられる。このとき、AはBの広義における「記号(sign)」であるという。

見る人がそこで行っているのは、AをBに結びつけることによって、自分自身の中にある効果C(たとえば、傘を用意する習慣)を作り出すことである。パースは、このような場合におけるAを(狭義における)「記号(sign)」, Bを「対象(object)」, Cを「解釈項(interpretant)」とそれぞれよんでいる。

「解釈項」というのは聞き慣れない言葉だが、パースの造語である。これは、記号が受け手に与える理解の感情(情緒的解釈項), 記号の生み出す精神的・身体的努力(努力的解釈項), 記号の論理的な解釈(論理的解釈項), の三つの様式をもつ、とされる。第三の論理的解釈項は、「最終的論理的解釈項」というさらなる発展形態をもつが、これは受け手において生じる“習慣変化(habit change)”であるという。パースによれば、記号のめざすものはこの“習慣変化”である。

習慣変化をもたらす原因の第一は、驚きである。驚きは、いままで習慣的に結びつけていた二つの事物の関係を、別個の関係として考えるための起動力になる。第二に、実際に身体を動かしてみること(筋肉運動)もまた、習慣変化にとって重要である。しかし、習慣変化の実現に際しての決め手は、想像の中でさまざまな実験を試みることである。それは、第一、第二の場合以上に、重要な習慣変化をおこしうるといえる。

自分(自分たち)が現在のままの習慣をつづけているかぎり、いつかきっと悪い事態がひきおこされるにちがいない、という予測がたつときに、探求がはじまる。探求のさしあたっての課題は、最終的論理的解釈項を実質的に規定しうるような単純な一般命題(未来形条件法の形式をとる科学の基本構文)をつくりだすことであるが、この一般命題はつぎつぎと派生的な命題を作り出す起動力にもなるので、じっさいのところは探求に終わりはないということになる。

ところで、事象A(雲)は、必ずしも事象B(雨)にのみ結びつけられる、というわけではない。それを受け取る各人の固有の脈絡の中で、まったく異なる事象に結びつけられて解釈されることも当然おこりうる。AのBに対する関係が一般的なものであるとすれば、受け手の脈絡に支配されるA', A''に対する関係は、固有のものである。事象Aは、受け手の心中に美しい絵画を連想させることも、暗澹たる記憶を喚起することもできるのである<sup>11)</sup>。

それでは、記号と対象の間に存在する一般性と固有性の関係を考える手がかりを、パースはどのように与えているのだろうか。

記号、対象、解釈項、という三項存在として「記号」を定義したパースは、つぎに記号と対象の関係性への着目から、「アイコン(icon)、インデックス(index)、シンボル(symbol)」という記号の下位区分を導き出している。

記号と対象の関係には、類似性、因果性、約定性の三種類を想定することができる。この三種類の対応物が、アイコン、インデックス、シンボルであると定義される。

(1)「アイコン」とは、「自らの性質が対象との間に示す類似性によって、しかもその対象が現実存在してもしなくても、自分が所有する特性だけで対象に関わるような記号」である。たとえば、写真や映像、絵画は、主として指示対象との類似性に根拠をおいて成立している記号である。この指示対象は、架空のもの、不在のものであってもよい。指示対象の存在、不在の別は、アイコン的記号の成立にとっては要件ではないのである。宗教、芸術の領域で用いられるのは、主としてアイコン

的記号である。

(2)「インデックス」は、「関わりをもつ対象からじっさいに影響をうけることで、その対象に関わるような記号」であり、今、ここに生じる個別的・具体的な事実の指示に用いられる。温度計が環境の変化を告げる場合、風景の変容が社会変化を告げる場合、疾患が心身状態の変化を告げる場合などで、自然科学、社会科学、医学などの経験科学の領域で多く用いられている。

(3)「シンボル」は、「対象との類似性や物理的因果関係をかっこに入れて、記号使用者の関心と約定にもとづいて一般的な対象に関わることのできる記号」である。狭くは、数学の諸記号、憲法の条文などを指すが、実際には全ての言語表現がシンボリックな記号である。逆に言えば、いかなるシンボルも、なにほどこかの程度でアイコン性とインデックス性を含んでいる。人間に対して説得力を持つ(パースの用語で言えば、最終的論理的解釈項を支配しうる)シンボルは、アイコン、インデックスが適切な加減で配合されたシンボルである<sup>12)</sup>。

パースによれば、この三者は、過去、現在、未来という、時間の三つの位相にも対応しているという。

アイコンは、その存在が過去の経験に属しているものである。それはただ、心のイメージとしてだけ存在する。インデックスは、その存在が現在の経験に属するものである。シンボルの存在は、一定の条件が満たされれば、なにごとかが経験されるという現実的事実にある。(中略)シンボルの価値は、思想や行動を理性的にするのに役立ち、未来予測を可能にする点にある。<sup>13)</sup>

アイコン、インデックス、シンボルの関係規定は、一見錯綜しているかにみえるが、アイコン×インデックス=シンボル、というように単純に考えておくのが適切である。パースが異議を申し立てたのは、アイコンとインデックスの関係を矛盾・対立の関係とみる知的態度に対してである。宗教や芸術と自然科学・社会科学の関係についての一般的な通念は、パースの異議申し立てが今なお有効でありうることを示すものであるように、私は思う。

三者間の関係規定に際してパース自身が用いているのは、「第一性(firstness)」、「第二性(secondness)」、「第三性(thirdness)」という、彼自身が「現象学的カテゴリー」と名づけるところの仮設的な概念である<sup>14)</sup>。これは、人間に対して世界が複合的な構造として与えられる点への着眼にもとづく、世界の成り立ちについての根本仮説である。

- 第一性 何かと関係づけられる以前に、それ自体として存在する存在のあり方。
- 第二性 他の何かとの関係において存在する存在のあり方。
- 第三性 以上の二要素を関係づけるような存在のあり方。

たとえば、この図式を、意識における世界の現われ方の説明に適用すると、

気分(feeling)、反動(reaction)、媒介(mediation)

というセットが、世界のあり方の説明では、

性質、事実、法則

というセットがそれぞれ得られることになる。さらに、探求の過程における「仮説形成(abduction)、帰納(induction)、演繹(deduction)」、記号の種類における「アイコン、インデックス、

シンボル」, 記号の構造における「記号, 対象, 解釈項」も, 同様の手続きを通して確かめられようとする。

第一性, 第二性, 第三性の関係についても, 第一性×第二性=第三性, という式を考えてみればよい。第三性が第一, 第二を繰り込んで自己を満たしていく運動は, 無限かつ連続的な自己更新の過程であり, それは人間が, 現在の状況から出発して世界を再定義していく過程に対応するものである。この自己更新の過程をパースは「哲学にとって最も大事なこと」としたうえで, 「シネキズム (synechism)」(「連続主義」などと訳される。同義のものとして continuum も併用) と名づけている。

### 3 記号から言語へ 再定義への鍵

ここで注目すべき点は, 第一性, 第二性, 第三性, という区分が, ちょうど実際に言語が用いられている場面において, 話し手(書き手), 言語表現, 聞き手(読み手), がおかれている関係をぴたりと言いあてているようにみえることである。そのことは, パースの記号論が, 言語の本質を照らし出すような基本性格を備えていることを物語っているように思われる。パースの記号論は, 話し手(書き手), 言語表現, 聞き手(読み手)の三項からなる言語論として読み直される可能性をもっている。

記号においては, 意味するものと意味されるものの関係はつねに自動的・習慣的なものである。ところが言語においては, 意味するものと意味されるものの関係は, つねに話し手(書き手)と聞き手(読み手)相互の, 想像上の作業を含む(試行錯誤を通しての)確かめあいの産物でしかありえない。それは, 人間同士の関係のあり方そのものによって欲望が根拠づけられる人間に固有の条件である。パースが記号を三項的存在者として考えたことの中には, 記号と言語の区分を前提にした言語本質論の萌芽が含まれていたように思われる。

パースの記号論とソシュールの言語学は, 着想においても用語法においても著しく異なっているが, ヤコブソンが直観していたように, 言語の本質考察という課題を前におくならば, 並列的な位置関係をもつものと見ることができるようになる。

ソシュールは, 言語から実際の言語を成り立たせている話し手(書き手), 聞き手(読み手)という個別的な構成要素を捨象し, シニフィアン, シニフィエの恣意性からなる体系としての「ラング」を取り出すことで, 言語がもつ一般性(いかなる個別言語にも通有の属性)を浮き彫りにしようとする。これに対して「ラング」ではないもの, つまり実際の言語使用は「パロール」とよばれ, 「ラング」の学と相補的な関係に立つような「パロール」の学の可能性が示唆されることになる。

一方, パースの記号論は, 一般性を道具とみてこれを「記号」と定義する論であるとみることができる。ただしパースの考える一般性とは, 形式的な恣意性(歴史とは無関係に承認される事柄)ではなく, 経験的な約定性(歴史的に徐々に承認を与えられてきた事柄)を指している。この恣意性と約定性は決して矛盾するものではなく, むしろ相互に条件を与え合う関係におかれているといえる<sup>15)</sup>。

このように見ていくと, パースの記号論は, ちょうどソシュールが「パロールの学」と名でよぼうとしたものに対応するような意味をもつものであることがわかる。それは「ラング」を道具としながら, 話し手(書き手)と聞き手(読み手)という固有の人間同士で行われるような, 特定のコンテキストに依存した個別的, 一回的な言語表現の存在理由を照らし出す, もう一つの学の領域を指

さすものなのである<sup>16)</sup>。

	第一性	第二性	第三性
記号の構造 (パース)	記号	対象	解釈項
記号の種別 (パース)	アイコン	インデックス	シンボル
言語の構造 (ソシュール)		シニフィアン /シニフィエ	
言語の構造	話し手 (書き手)	言語表現	聞き手 (読み手)

「アイコン，インデックス，シンボル」の三つ組みを，言語表現の構成要素として再定義する際の論点として，さしあたってつぎの四つをあげておくことにする。

第一に，パースは，もっとも単純な記号を，「AをBとして読む」(雲を雨の予兆として読む)のという形式をもつものとして考えていたが，話し手(書き手)，言語表現，聞き手(読み手)という関係構造の中に記号の使用を置きなおしてみるとすれば，そこに「何のために」(欲望的顧慮)というもう一項を加え，「Aを～のためにBとして読む」という形へと書き換えられる必要がある。

もしこの欲望的顧慮を捨象するならば，事象の解釈は無限通り成立することになり，記号としての要件をなさないことになるだろう。記号において雲と雨が結びつきうるのは，あくまでも雨が降ることについての解釈者 人間の顧慮が介在してのことである。

そのことを考えるならば，アイコン，インデックス，シンボルという記号区分は，「記号」と「対象」の関係からというよりも，むしろ「記号」と「欲望の対象」の関係から導かれるとされたほうが適切な言い方であるように思われる。ここにいう「欲望の対象」は，性，食，眠などに関わる生理学的諸対象とともに，たとえばカントが「物自体」と呼び，パースが「美」と呼んでいたような，世界(他人や社会を含む)の中で信念が検証される際の最高基準の二つをさしている。欲望の対象が人間に対してこうした二重性を伴って現れることは，状況に拘束されつつもその外部を思い描かずにはいられないという，人間存在の二重性にそのまま由来する事態である。

第二に，言語の使用には，話し手(書き手)，言語表現，聞き手(読み手)という三つの要素が関与するが「アイコン，インデックス，シンボル」の三つ組みは，(1)話し手(書き手)の意図と言語表現の関係，(2)言語表現と聞き手(読み手)の理解の関係の中に，それぞれ置き直されるべきである。

(1)について言えば，話し手(書き手)の意図と言語表現の類似性は語り口(文体)において示されるし，因果性は素材の選択において，約定性は主張(命題)の内容において示されることになるだろう。また(2)について言えば，言語表現と聞き手(読み手)の理解の類似性は直観的印象において，因果性は直観の検証において，約定性は評価(承認もしくは不承認)において示されるこ

とになる。私たちがある言語表現に対して内容以前の違和感を覚えることがあるとすれば、そこにアイコン、インデックス、シンボルという三者間の均衡の欠損を感じるからではないだろうか。

第三に、言語表現は、自己との関係、既知の他者との一対一関係、未知の他者と一(多)対多関係、という三通りの関係性を顧慮しながら行われるものであるが、アイコン、インデックス、シンボルの区分は、これを言語表現の相関項としてみるならば、そこに想定される人間関係の様相の違いを映し出す鏡ともなっている。精神分析のジャック・ラカンが構想した現実界 想像界 象徴界の三つ組みは、「対自」、「一対一」、「一(多)対多」、という人間関係の三通りの様相に対応可能な区分であるが、そのことは、ラカンの構えとパースの構えを比較検討する可能性が、言語表現への着目によって開かれうることを示すものであるように、私は思う。

第四に、繰り返し述べてきたように、言語の使用においては、使用者に固有のコンテキストと万人に通有のコンテキストがつねに重なり合い、それぞれの言語表現に独自の意味と価値を与えている。パースの三つ組みは、固有のコンテキストと一般的なコンテキストが、交錯しながら複合をとげていく過程に言及しようとしたものであるといえる<sup>17)</sup>。

ソシュールの言語学は、個々の言語使用者の意図や関心、もしくは固有のコンテキストを捨象した一般性の形式としての言語を措定する企てであったが、ヤコブソンが詩的言語の分析において示唆したように、アイコン性、インデックス性、シンボル性は、あくまでも固有性、一回性をこととする言語表現の成立を実際に支えている属性である。理念としての言語と現実用いられている言語の混同が言語学や記号学をはじめとする諸学で繰り返されている事情を考えると、両者の区分もまた、パースの記号論が与えうる示唆の中で重要な一角を占めるものである。

## おわりに

本論は、本誌前号に掲載された「信念の検証について C.S.パースの認識批判再考」の姉妹編である。

前の論考では、人間同士の信念対立(科学的世界像と宗教的世界像の相克葛藤を含む)への関心がパースの探求の起動力として存在していたことを指摘し、美の理念を諸信念検証の最高基準として再定義する彼の規範学の構想の評価を試みた。本論では、彼が生涯にわたって取り組みつづけた記号論の構想が、以上の関心を軸としながら、形式としての言語の分析ではなく、個々の人間同士の間で用いられる現実言語の本質と諸用法の検討に道を開く企てであったことを述べようとした。アイコン、インデックス、シンボルの三つ組みを言語表現の属性として見直す観点の提示は、そのための小さな一歩である。

なお、前論文および本論は、2003年3月、本学大学院文学研究科に提出した修士論文「アイコン・インデックス・シンボル C.S.パース記号論の批判的検討」の一部を省略した上で、若干の補正を加えたものである。

## 注

- 1) 竹内成明訳、『ディオゲネス』(日本語版)創刊号,河出書房,1967年,所収。原題は“Quest for the Essence of Language”。
- 2) 「形式化」については,たとえば柄谷行人による次のような説明がある。「二十世紀において顕在化しはじめた文学や諸芸術の変化,たとえば抽象絵画や十二音階の音楽などは,互いに平行しあっているだけでなく,物理学,数学,論理学の変化にも根本的に対応している。一般的にこの変化をと呼ぶことができる。形式化とは,や意味内容・をカッコにいれて項(それ自体は意味のない)と項の関係のみを考察することだといってよい。先にいった全般的な変化の特徴は,それらがいわゆる自然・現実・経験から乖離することによって,自律的な世界を形成しはじめたところにあるが,そのことこそ形式化が意味することがらである。この現象は各領域でそれぞれ考察され歴史的に跡づけられているが,それらがパラレルなことが明らかであってみれば,この変化の性質は,より一般的に「形式化」ということそのものに見出されなければならない。」(『隠喩としての建築』『隠喩としての建築』p.40)
- 3) フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』(小林英夫訳,1972年,pp.95-101)
- 4) 擬態語や擬声語などにみられるように,必ずしも恣意的とはいえないような結びつきも,意味するものと意味されるものの中に存在するが,これは通常「有縁的」とよばれている。
- 5) ソシュール自身もまた,形式的,一般的な言語を対象とする「ラング」の言語学とは区別される,具体的,個別的,一回的な言語使用の理解をめざす「パロール」の言語学の可能性に言及している。『一般言語学講義』,p.34)
- 6) 「クラチュロス」(水地宗明訳),『プラトン全集2 クラチュロス テアイテトス』(岩波書店,1974年)。
- 7) 前掲書,p.4
- 8) 信念の正しさ(妥当性)の根拠とは何かという問いが,プラトンの諸作品を一望する観点を提示した竹田青嗣によれば,中期以降のプラトン対話編の主要な検討主題になるという(竹田『プラトン入門』)。
- 9) 『芸術と幻影』,pp.492-498
- 10) 『棒馬考』,pp.22-29
- 11) AとBの関係を「隠喩的」とよぶとすれば,AとA'の関係は「換喩的」とよぶことができる。
- 12) 英語学者の有馬道子は,『パースの思想』(岩波書店,2001年)において,パースの述べるような,アイコン性,インデックス性,シンボル性が対等に融合された完全な記号,というものは実際には存在し得ない,という点をふまえて,それゆえに,人間の世界解釈においては,そのいずれかの要素が「突出」し,そのことが病理,もしくは創造性として現出することになるのではないか,という仮説を提示している。(同書,pp.108-136)
- 13) Collected Papers vol. II, 347節
- 14) これは,E.フッサールの創始した「現象学」と直接の連絡関係はなかったようである。パース研究者の米盛祐二によれば,phenomenologyという用語をパースがはじめて用いたのは1902年のことであり,しだいに関心をよせるようになっていたヘーゲルの『精神現象学』を念頭においていた可能性が高いという(『パース著作集1』所収,「訳者解説」)。
- 15) ソシュールの形式化においては,シニフィアンとシニフィエの関係を必然的であるとする制度的な物の見方と,これを恣意的であるとする反制度的な物の見方の二項対立が前提とされている。ちょうどそれは,カントが現象界と叡知界,因果律と自由の区分を基本にしたことに対応しているといえるが,これを受けるパースの構えには,制度と反制度の二項対立の自己更新をめざす手がかりがある。
- 16) 有馬道子は,ソシュール言語学とパース記号論の比較対照作業が,言語本質の考察にとってきわめて有望であることを強調している。有馬は,ソシュール以後の構造主義と,それ以後のポスト構造主義およびそれ以前の実存主義の関係を,ソシュールとパースにみようとしている。パースの「シネキズム」の概念と,デリダの「差延」やベルグソンの「持続」の近接性の指摘(前掲書,p.59)は興味深い。
- 17) たとえば幕末期の日本において,「尊王攘夷」という概念が転生をとげた過程を例にとることができる。それは当初,即自的な感情の容器でもあったが,経験の中で欧米列強の侵略に対する抵抗のシンボルとしての規定を与えられるようになり,同時に普遍に開かれた側面をも獲得していくことになる。

## 参考文献

\* 著者別, アルファベット順

- 有馬道子『パースの思想；記号論と認知言語学』岩波書店，2001年
- BERNSTEIN, R.J. (ed.), *Perspectives on Peirce, Critical Essays on Charles Sanders Peirce*, New Haven and London, Yale University Press, 196 (岡田雅勝訳『パースの世界』木鐸社，1978年)
- CRONE, R. Koerner, J.L., *Paul Klee :Legend of the Sign*, New York, Columbia University Press, 1991 (太田泰人訳『記号をめぐる伝説』岩波同時代ライブラリー，1994年)
- ECO, U., *A Theory of Semiotics*, Bloomington, Indiana University Press, 1976 (池上嘉彦訳『記号論I・II』, 岩波現代新書，1980年)
- GOMBRICH, E.H., *Art and Illusion -- A Study in the Psychology of Pictorial Representation*, London, Phaidon Press, 1972 (瀬戸慶久訳『芸術と幻影』岩崎美術社，1979年)
- GOMBRICH, E.H., *Meditations on a Hobby Horse and Other Essays on the Theory of Art*, London, Phaidon Press, 1963 (二見史郎ほか訳『棒馬考 イメージの読解』勁草書房，1988年)
- 石田浩之『負のラカン』誠信書房，1991年
- JAKOBSON, R., "Quest for the Essence of Language" (竹内成明訳「言語本質の探求」『ディオゲネス・日本語版創刊号』河出書房，1967年)
- JAKOBSON, R., *Six leçons sur le son et le sens*, Paris, Les éditions de Minuit, 1976 (花輪光訳『音と意味についての六章』みすず書房，1977年)
- KANT, I., *Kritik der reinen Vernunft* (篠田英雄訳『純粹理性批判』岩波文庫，1961 - 1962年)
- 柄谷行人『隠喩としての建築』講談社，1983年
- LEVI-STRAUSS, C., *La pensée sauvage*, Paris, Plon, 1962 (大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房，1976年)
- LOCKE, J., *An Essay Concerning Human Understanding*, 1690 (加藤卯一郎訳『人間悟性論 上・下』岩波文庫1940年)
- MORRIS, C.W., "Foundations of the Theory of Signs," *Foundations of the Unity of Science*, Vol.1, University of Chicago Press, 1938, "Esthetics and the Theory of Signs," *Journal of Unified Science* 8, 1939 (内田種臣・小林昭世訳『記号理論の基礎』勁草書房，1988年)
- 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店，1981年
- 丸山圭三郎『ソシュールを読む』岩波書店，1983年
- 野口良平「倫理から論理へ C.S.パース」, 作田啓一編『人間学 命題集』新曜社，1999年
- 野口良平「『異邦人』の力」, 『Becoming』10号，2002年
- 野口良平「信念の検証について C.S. パースの認識批判再考」(『立命館文学』) 第581号，2003年
- PEIRCE, C.S., Cohen, M.R. (ed.), *Chance, Love, and Logic*, New York, George Braziller, 1956 (浅輪幸夫訳『偶然・愛・論理』三一書房，1982年)
- PEIRCE, C.S., HARTSHORNE, C. & Weiss, P. (ed.), *Collected Papers of Charles Sanders Peirce ( I, V, VI)*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1935
- PEIRCE, C.S., the Peirce Edition Project (ed.), *The Essential PEIRCE - Selected Philosophical Writings vol.1-2*, Bloomington and Indianapolis, Indiana University Press, 1998
- PEIRCE, C.S., Kenneth Laine Ketner (ed.) *Reasoning and the Logic of Things : The Cambridge Conferences of 1898*, Harvard University Press, 1992 (伊藤邦武訳『連続性の哲学』岩波文庫，2001年)
- PEIRCE, C.S., 内田種臣編訳『パース著作集2 記号学』, 勁草書房，1986年
- プラトン, 水池宗明訳「クラチュロス」『プラトン全集2 クラチュロス テアイトス』岩波書店，1974年
- SAUSSURE, F. de, Bally, C. et Sechehaye, A. (ed), *Cours de linguistique Générale*, Lausanne et Paris, Payot, 1916 (小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店，1972年)
- 竹田青嗣『言語的思考へ 脱構築と現象学』径書房，2001年
- 竹田青嗣『プラトン入門』ちくま新書，1999年
- 上山春平編『世界の名著59 パース・ジェイムズ・デューイ』中央公論社，1980年

(本学大学院博士後期課程)